

第 7 3 期

事 業 報 告 書

平成22年 4 月 1 日から

平成23年 3 月31日まで

松本油脂製薬株式会社

第 73 期 事 業 報 告

〔平成22年4月1日から
平成23年3月31日まで〕

I 企業集団の現況に関する事項

1. 事業の経過及びその成果

当連結会計年度における我が国の経済は、中国・インドなどをはじめとする新興国の外需拡大などで景気を戻しつつありましたが、急激な円高、株価の低迷、各種原料の高騰の影響及び東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故により不透明感が増しております。

当社グループの重要な販売分野である国内繊維産業におきましては、生産拠点の海外移行や統廃合による生産中止により淘汰が進み、売上の減少に歯止めがかかってきました。一方海外の繊維産業向けでは、中国の内需拡大政策やアジア地域の活況により順調に売上を伸ばしております。

非繊維分野におきましては、国内では自動車産業の大幅減産が緩和され、また秋口以降住宅関連の補修用材料の販売が好調に推移してまいりました。また海外向けでは、中国をはじめとするアジア地域での需要は引き続き旺盛で、特に中国・東南アジアの自動車産業向けは急拡大しております。

しかし、新興国の様々な分野での需要拡大に伴い、石化製品やオレオ製品の各種原料の高騰が続いており、製品価格の適正化が急務となっております。

このような状況下、当社グループでは販売・利益を確保するため、競争力のある高品質・低価格商品の開発を行うとともに、市場ニーズに合致した商品の早期開発に努めてまいりました。その結果、国内での市場縮小や大幅な円高の進行というマイナス要素はありましたが、売上高、営業利益、当期純利益は前年実績を上回ることができました。

以上の結果、当連結会計年度における当社グループの業績は、売上高26,556百万円（対前年同期比112.8%）、営業利益1,170百万円（対前年同期比118.4%）、経常利益1,161百万円（対前年同期比75.5%）、当期純利益714百万円（対前年同期比101.0%）となりました。

・部門別の業績は、次のとおりであります。

① 界面活性剤部門における当連結会計年度の売上高は19,379百万円（対前年同期比114.9%）、営業利益は845百万円（対前年同期比126.1%）となりました。

陰イオン界面活性剤の分野におきましては、国内合繊メーカー各社への販売は底を打ち、昨年の実績を上回りました。海外合繊メーカーへの販売は中国向けが好調で、売上高は2,962百万円（対前年同期比109.5%）となりました。

非イオン界面活性剤の分野におきましては、国内では、消費低迷と繊維製品の低価格化による海外シフトの影響で低迷していたテキスタイル分野の加工量が増加しました。炭素繊維は航空機、産業資材向けを中心に回復し、処理剤の販売が増加しました。また、化学工業分野では洗浄剤原料の販売が増加しました。海外では工業用繊維分野、衣料用分野、弾性繊維用分野、高機能繊維分野とも好調で、特に中国では設備の増設・増産が行われており、販売金額が増加し、売上高は15,617百万円（対前年同期比116.8%）となりました。

陽・両性イオン界面活性剤の分野におきましては、縮小傾向であった繊維全般の加工が底を打ち、関連加工剤の販売は、昨年実績を上回りました。化学工業分野では洗浄剤原料の販売は回復してきましたが、原料価格の高騰が続き、製品価格への転嫁が急務になっており、売上高は799百万円（対前年同期比101.0%）となりました。

- ② その他部門における当連結会計年度の売上高は7,176百万円（対前年同期比107.3%）、営業利益は324百万円（対前年同期比102.2%）となりました。

高分子・無機製品等の分野におきましては、繊維関連では、織布向け製織用糊剤の販売は国内生産が縮小の中で堅調に推移しました。非繊維関連では、化粧品原料は堅調に推移しており、建材関係では住宅着工件数の低迷が続いておりますが、補修用途の拡大で有機高分子製品の出荷が回復傾向となりました。自動車生産は国内減少分を海外拡大で補い、ゴム成形品加工剤・熱膨張性マイクロカプセルの販売も好調に推移しており、売上高は7,176百万円（対前年同期比107.3%）となりました。

2. 対処すべき課題

国内の経済は、東日本大震災、福島第一原子力発電所の事故により不透明感が増し、急激な円高、各種原料の高騰等により経営環境は引き続き厳しい現状にあります。また、当社グループの震災による被害は、原材料購入先の企業様が被災し、一部の原材料が不足気味になった程度にとどまり、生産活動の影響は軽微なものでした。

このような状況下ではございますが、当社グループといたしましては、より競争力のある新商品の開発、販路の拡大及び社内の合理化をこれまで以上に進めることにより全社一丸となり業績の回復と収益率の向上に努める所存でございます。

ここ数年静岡工場の設備増強や大阪工場の新設等、新しい時代に対応した設備の増強に努めてまいりましたが、それぞれの有効活用と本社工場の思い切った設備の見直しを展開してまいりたいと考えております。

また研究開発につきましては当社グループが誇る人材をフルに活用し、付加価値のより高い新素材・新用途の開発を行っておりますが、今後とも社会情勢の変化に対応すべく適材適所で機動的に事業の運営を図ってまいりたいと考えております。

株主各位におかれましては、今後ともより一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

3. 設備投資等及び資金調達の状況

- (1) 当連結会計年度の設備投資総額は約405百万円でありましたが、その主なものは、本社工場における生産設備の増設であります。
- (2) 上記の設備投資資金は、いずれも自己資金によってまかなっております。

4. 財産及び損益の状況の推移

(単位：百万円)

区 分	第 70 期	第 71 期	第 72 期	第73期（当期）
	[平成19年4月1日から 平成20年3月31日まで]	[平成20年4月1日から 平成21年3月31日まで]	[平成21年4月1日から 平成22年3月31日まで]	[平成22年4月1日から 平成23年3月31日まで]
売 上 高	27,325	24,358	23,551	26,556
経 常 利 益	1,873	771	1,539	1,161
当 期 純 利 益	1,368	141	707	714
1株当たり当期純利益	122円41銭	13円29銭	69円46銭	70円17銭
純 資 産	40,092	37,434	37,913	37,725
総 資 産	49,482	43,635	45,655	46,501

(注) 1株当たり当期純利益は、期中平均発行済株式総数に基づき算出しております。

5. 重要な親会社及び子会社の状況

(1) 子会社等の状況

当期の連結対象は株式会社マツモトユシ・インドネシア1社で、当社の議決権比率は49%ですが、実質的に支配しているため子会社としております。持分法適用会社は日本クエーカー・ケミカル株式会社、他1社であります。

当連結会計年度の売上高、経常利益、当期純利益は事業の経過及びその成果に記載のとおりであります。

(2) その他

松本興産株式会社は当社の議決権を20.8%所有しており、当社は同社の関連会社であります。

6. 主要な事業内容

品 目		用 途	主 要 製 品
界 面 活 性 剤 部 門	陰イオン界面活性剤	織 維 工 業	化合繊紡糸紡績油剤、チーズ用柔軟平滑剤
		農 薬 工 業	農薬防疫用乳化剤
		ゴ ム 工 業	防着、離型剤
界 面 活 性 剤 部 門	非イオン界面活性剤	洗 剤 工 業	食器、食品洗浄剤
		織 維 工 業	化合繊紡糸紡績油剤、コーニングオイル、フィラメント
		織 維 工 業	織布用経糸油剤、精練洗浄剤、染色助剤
		鉄 鋼 金 属 工 業	圧延油、作動油、金属洗浄剤
		製 缶 工 業	成型用油剤
		樹 脂 工 業	合成樹脂用練込帯電防止剤
界 面 活 性 剤 部 門	陽・両性イオン界面活性剤	香 粧 品 工 業	乳化剤
		公 害 防 止 産 業	流出油処理剤
		織 維 工 業	柔軟仕上剤、チーズ用柔軟平滑剤、永久通気性撥水剤
そ の 他 部 門	高分子・無機製品	樹 脂 工 業	合成樹脂用帯電防止剤
		香 粧 品 工 業	洗剤原料
		織 維 工 業	経糸用糊剤、風合改良剤、繊維加工剤
		建 材 工 業	壁材用接着補強剤、軽量化充填剤
		機 械 工 業	合成ダイヤモンド
		電機・機械工業	磁性流体
		自 動 車 産 業	軽量化剤
		印 刷 工 業	インキ、塗料加工剤
香 粧 品 工 業	触感向上剤、紫外線防止剤		
仕 入 商 品	仕 入 商 品	エレクトロニクス産業	感熱用薬剤、電池用多孔化剤
		建 材 工 業	リシン用基剤樹脂
		織 維 工 業	経糸用糊剤

7. 営業所及び工場

(1) 当 社

営 業 所	大阪営業所	東京営業所	名古屋営業所
	広島営業所	金沢営業所	
工 場	本社製造部門	静岡製造部 (袋井市)	大阪製造部 (高石市)

(2) 子会社

工 場	インドネシア工場
-----	----------

8. 従業員の状況

区 分	従 業 員 数	前連結会計年度末比増減
合 計	447名	7名減

9. 主要な借入先

借 入 先	借 入 金 額
株式会社 三菱東京UFJ銀行	500百万円
株式会社 三井住友銀行	200百万円

II 会社の株式に関する事項

1. 発行済株式総数 10,178,321株 (自己株式 1,103,308株を除く。)
2. 株 主 数 628名
3. 大 株 主

株 主 名	持 株 数	持 株 比 率
松 本 興 産 株 式 会 社	2,105,390株	20.69%
STATE STREET BANK AND TRUST COMPANY	1,058,246	10.40
木 村 直 樹	920,619	9.04
松 栄 産 業 株 式 会 社	867,423	8.52
有 限 会 社 木 村 直 樹	519,750	5.11
株 式 会 社 三 菱 東 京 U F J 銀 行	338,700	3.33
松 本 新 太 郎	318,725	3.13
岩 田 み ち 子	289,772	2.85
相 田 襄 治	225,775	2.22
木 村 芳 樹	216,188	2.12

(注) 持株比率は、自己株式を控除して計算しております。

Ⅲ 会社役員に関する事項

1. 取締役及び監査役の氏名等

会社における地位	氏名	担当及び重要な兼職の状況
代表取締役社長	木村直樹	松本興産株式会社代表取締役社長
代表取締役専務	矢野真剛	管理部門担当
専務取締役	薦谷幹男	営業部門担当 第三営業部長
常務取締役	高田武海	海外事業部長
常務取締役	木村芳樹	監査室長
取締役	渡邊潤	第一事業部長兼第一研究部長兼合弁事業室長
取締役	高橋修	生産本部長兼製造部長
取締役	田中憲吾	生産本部副本部長兼静岡製造部長
取締役	伊藤茂樹	第三事業部長兼第三研究部長
取締役相談役	松本新太郎	松栄産業株式会社代表取締役社長
常勤監査役	増田俊明	
常勤監査役	森下輝久	
常勤監査役	吉岡孝	
監査役	叶智加羅	叶法律事務所代表 株式会社大森屋社外監査役

(注) 1. 当期中の異動

平成22年6月25日開催の第72回定時株主総会において、田中憲吾、伊藤茂樹の両氏が新たに取締役に、増田俊明、森下輝久、吉岡孝の3氏が新たに監査役に選任され就任いたしました。また、同日、代表取締役専務綿宏之、常務取締役増田俊明、取締役森下輝久、取締役袖山博、監査役岩崎輝一郎の5氏は任期満了により退任し、常勤監査役瀬川洋二氏は辞任により退任いたしました。

2. 常勤監査役森下輝久氏は、35年間当社の経理業務を担当しており、財務及び会計に関する相当程度の知見を有するものであります。

3. 常勤監査役吉岡孝、監査役叶智加羅の両氏は社外監査役であります。
なお、常勤監査役吉岡孝氏につきましては、株式会社大阪証券取引所に対し、独立役員として届け出ております。

2. 取締役及び監査役の報酬等の額

区	分	支給人員	支給額
取	締	14名	166百万円
監	査	6名	27百万円
合	計	20名	194百万円

(注) 取締役の支給額には、使用人兼務取締役の使用人分給与は含まれておりません。

3. 社外役員に関する事項

(1) 重要な兼職先と当社との関係

監査役叶智加羅氏は、叶法律事務所の代表及び株式会社大森屋の社外監査役であります。当社は、株式会社大森屋とは特別の関係はありませんが、叶法律事務所との間には法律顧問契約があります。

(2) 当事業年度における活動状況

イ. 取締役会及び監査役会の出席状況

	取締役会(13回開催)		監査役会(14回開催)	
	出席回数	出席率	出席回数	出席率
常勤監査役 吉岡 孝	10回	100%	10回	100%
監査役 叶 智加羅	13回	100%	14回	100%

(注) 常勤監査役吉岡孝氏は、平成22年6月25日開催の第72回定時株主総会において新たに選任されたため、開催回数が他の社外監査役と異なります。なお、就任後の取締役会及び監査役会の開催回数は10回であります。

ロ. 取締役会及び監査役会における発言状況

- 常勤監査役吉岡孝氏は、長年ジャーナリストとして培われた幅広い知識と経験に基づき、取締役会及び監査役会において議案の審査等に関して適宜発言を行っております。
- 監査役叶智加羅氏は、弁護士としての見識に基づき、取締役会及び監査役会において議案の審査等に関して適宜発言を行っております。

(3) 責任限定契約の内容及び概要

当社は、社外監査役として有用な人材を迎えることができるよう、現行定款において、社外監査役との間で当社への損害賠償責任を一定の範囲内に限定する契約を締結できる旨を定めております。これに基づき、社外監査役である吉岡孝、叶智加羅の両氏は、当社との間で、当該責任限定契約を締結しております。

その契約内容の概要は次のとおりであります。

- 社外監査役が任務を怠ったことによって当社に損害賠償責任を負う場合は、会社法第425条1項に規定する最低責任限度額を限度として、その責任を負う。
- 上記の責任限定契約が認められているのは、当該社外監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意かつ重大な過失が無いときに限るものとする。

(4) 報酬等の総額

区 分	支給人員	支給額
社 外 監 査 役	3名	9百万円

IV 会計監査人の状況

1. 会計監査人の名称

清稜監査法人

2. 当事業年度に係る会計監査人の報酬等の額

① 報酬等の額	17百万円
② 当社及び子会社が会計監査人に支払うべき金銭その他の財務上の利益の合計額	17百万円

(注) 当社と会計監査人との間の監査契約において会社法に基づく監査と金融商品取引法に基づく監査の監査報酬の額を区別しておりませんので、上記の金額には金融商品取引法に基づく報酬等の額を含めております。

3. 子会社の監査に関する事項

I 企業集団の現況に関する事項 5. 重要な親会社及び子会社の状況に記載の当社の重要な子会社である株式会社マツモトユシ・インドネシアについては、当社の会計監査人以外の監査法人の監査を受けております。

4. 会計監査人の解任又は不再任の決定の方針

当社では、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める事項に該当すると認められる場合は、監査役全員の同意に基づき監査役会が、会計監査人を解任いたします。解任後最初に招集される株主総会において、会計監査人を解任した旨と解任した理由を報告いたします。

なお、監査役会は会計監査人の継続監査年数等を勘案しまして、再任もしくは不再任の決定をいたします。

V 業務の適正を確保するための体制

1. 取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

取締役及び使用人が法令、定款、社内規程及び社会規範を遵守すべき基本として「松本油脂製薬グループ企業行動規範」を制定し、コンプライアンスを徹底する体制を構築する。コンプライアンス担当取締役は、全社横断的なコンプライアンス体制の整備及び問題点の把握・改善に努める。

2. 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制
当社は、法令及び「文書管理規程」に従い、取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理を行い、必要に応じて閲覧可能な状態を維持する。
3. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制
 - (1) リスク管理体制については「リスク管理規程」に基づき、松本油脂製薬グループの横断的なリスクマネジメント体制の整備、問題点の把握及び危機発生への対応を行う。
 - (2) 組織横断的リスクへの対応は、代表取締役社長を本部長として対策本部を設置し、管理部を事務局として迅速な対応を行い、損害の拡大を防止しこれを最小限にとどめる。各部門所轄業務に附属するリスクは担当部門がこれにあたり、その状況はすべて取締役会・監査役会及び管理部に報告される。
4. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
取締役の職務の執行については、「組織・業務分掌規程」及び「職務権限規程」に基づいて、月一回開催される取締役会において決定する。また必要に応じて臨時取締役会及び代表取締役との打合せ、並びに取締役を横断する連絡会議において審議し、意思決定のプロセスの効率化・迅速化を図るとともに、定期的な運用状況を検証する体制をとる。
5. 当会社及び子会社からなる企業集団における適正を確保するための体制
当社グループの業務の適正については、法令・会計原則・税法その他の社会規範に照らし適正なものとし、子会社を担当する取締役は、子会社の法令の遵守並びにリスク管理体制を構築する責任を持つ。子会社は、業務推進状況及び地域社会の様相について随時子会社を担当する取締役に報告し、意思の疎通を図る。
6. 監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する体制並びにその使用人の取締役からの独立性に関する事項
補助する使用人は置かないが監査役の職務を補助すべき組織として、管理部がこれを担当する。
なお、補助業務に関しては取締役からの独立性を確保する。

7. 取締役及び使用人が監査役に報告するための体制その他の監査役への報告に関する体制

取締役は当社の目的の範囲外の行為その他法令もしくは定款に違反する行為、又は著しい損害の生じるおそれのある事実を発見したときは、直ちに監査役に報告する。

なお、使用人にあたっては取締役を経由して報告するものとする。

8. その他監査役会の監査が実効的に行われることを確保するための体制
 - (1) 監査役は、重要な意思決定のプロセスや業務の執行状況を把握するため、取締役会及び経営会議等重要な会議に出席するとともに、稟議書等業務執行に係わる重要な文書を閲覧し、取締役及び使用人に説明を求める。
 - (2) 監査役会による取締役及び使用人から情報収集の機会及び監査法人との情報交換の機会を確保する。

VI 株式会社の支配に関する基本方針

1. 当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針

当社は、安定的かつ持続的な企業価値の向上が当社の経営にとって最優先課題と考え、その実現に日々努めております。したがって、当社は、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者は、当社の経営理念、企業価値の様々な源泉、当社を支えるステークホルダーとの信頼関係を十分に理解し、当社の企業価値ひいては株主の皆様様の共同の利益を中長期的に確保・向上させる者でなければならないと考えております。

上場会社である当社の株式は、株主及び投資家の皆様による自由な取引に委ねられているため、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方は、最終的には株主の皆様のご意思に基づき決定されることを基本としており、会社の支配権の移転を伴う大量の買付けに応じるか否かの判断も、最終的には株主の皆様全体の意思に基づき行われるべきものと考えております。また、当社は、当社株券等の大量の買付けであっても、当社の企業価値ひいては株主の皆様様の共同の利益に資するものであればこれを否定するものではありません。

しかしながら、事前に当社取締役会の賛同を得ずに行われる株券等の大量の買付けの中には、その目的等から見て企業価値ひいては株主の皆様様の共同の利益に対する明白な侵害をもたらすもの、株主の皆様様に株式の売却を事実上強制するおそれがあるもの、当社取締役会が代替案を提案するための必要十分な時間や情報を提供しないもの、当社が買収者の提示した条件よりも有利な条件をもたらすために買収者との協議・交渉を必要とするものなど、当社の企業価値ひいては株主の皆様様の共同の利益を毀損するおそれをもたらすものも想定されます。

当社は、このような当社の企業価値や株主の皆様の共同の利益に資さない大量の買付けを行う者が、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者として不適切であり、このような者による大量の買付けに対しては、必要かつ相応な対抗措置を採ることにより、当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益を確保する必要があると考えております。

2. 当社の基本方針の実現に資する特別な取組み

(1) 当社の企業価値の源泉

当社は、大正15年の創業以来、界面活性剤メーカーとして、紡糸・紡績油剤から糊付け、染色、最終仕上げ加工まで繊維産業の全ての生産工程に係わる薬剤を提供し、繊維産業の発展に大きく貢献してまいりました。

また、一般工業分野においても、長年蓄えてきた界面科学の技術を駆使して、様々な機能性工業薬品を開発し、多様な産業分野への市場開拓に力を注いでまいりました。

当社は、このような当社の企業価値の源泉は、①繊維産業のグローバル化に伴う新たな市場を開拓する力、②炭素繊維やアラミド繊維あるいは生分解性繊維等スーパー繊維といわれる先端技術への対応力や繊維産業向けの薬剤の高機能化に伴う技術開発力、③マイクロカプセル・マイクロビーズ等の超微粒子の分野において当社が占める高いマーケットシェア、④用途開発が進む一般工業用の界面活性剤・高分子製品の技術開発力及び⑤IS09001及びISO14001により運用される生産体制や品質保証体制など、創業以来培ってまいりました有形無形の財産に加えて、お取引先様、お得意先様、当社従業員等との長年に亘る信頼関係の維持等にあるものと考えております。

(2) 企業価値向上のための取組み

当社は、企業価値向上のための取組みといたしまして、当社の社是「顧客には良品廉価で満足を」が示すように、多様化するお取引先様、お得意様のニーズをいち早くとらえ、新たな価値ある製品をご提供できるよう豊富なスタッフによる研究開発・製造に努めてまいります。また、当社は界面活性剤分野のみならず、高分子分野におきましても独自の技術開発を行うことにより現在の地位を築いてまいりましたが、今後も技術開発力を高めていくことにより、海外顧客層の拡大を図り、グローバル経済への対応力を強化してまいります。さらに、当社及び当社グループの事業構成とその方向性を明確にし、選択と集中により経営資源の配分見直しを継続的に進め、資本効率を高める事業投資、設備投資を行い、将来に亘って拡大・発展させる布石を着実に打つことにより、今後の収益基盤の一層の安定と確立に努めてまいります。

具体的な設備投資に関しましては、八尾本社工場の再配置を進めるとともに、静岡工場のマイクロカプセルの設備を増設し、様々な需要に対応できる体制を構築してまいります。

また、平成20年10月には大阪府高石市の三井化学大阪工場内に新工場（大阪工場）が完成し、繊維向け薬剤の生産能力の拡充が可能となり、一層の企業価値の拡大が図れるものと考えております。

海外におきましては、成長市場である中国・インド等での拡販に重点課題として取組むとともに、北米やヨーロッパにおいても積極的な展開を図ってまいります。

当社は、業績の伸びに応じて株主利益の増大を図ることを利益配分の基本方針とし、剰余金の配当を行っております。また、内部留保資金につきましては、企業体質の強化と将来の事業展開に備えて活用してまいります。

さらに、当社は、社会的責任への取組み強化も積極的に推進してまいります。法令遵守や企業倫理の一層の浸透に努めるとともに、社会的責任に対する真摯な姿勢・誠実な対応がお取引先様、お得意先様から信頼される会社であるための要件であることを自覚し、界面活性剤メーカーとして常に付加価値をお届けする研究開発及び品質保証体制の強化に努めてまいります。これらに加え、環境マネジメントの推進、コンプライアンス体制の確立、リスクマネジメント等の充実にも鋭意努力してまいります。コーポレートガバナンスにつきましては、意思決定のスピードアップと活力のある組織運営に努めており、平成11年より変化する経営環境に迅速かつ緊張感を持って対応するため取締役の任期を1年としております。

今後とも界面活性剤メーカーとして安全で高品質な製品を提供することは勿論のこと、お取引先様、お得意先様に信頼され多様化するニーズに対応できる分野を開拓し、さらなる事業拡大と業績向上に向けて一層の努力を重ねてまいります。

当社は、これらの取組みが、当社の企業価値ひいては株主の皆様との共同の利益の確保・向上につながるものと考えております。

3. 基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取組み

当社取締役会は、基本方針に照らし、不適切な者によって当社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取組みの一つとして、当社株券等の大量な買付けを行う際の一定のルールを設ける必要があると考えました。

そこで、当社は、平成20年5月16日開催の当社取締役会において、第70回定時株主総会において株主の皆様にご承認いただくことを効力発生の条件として、当社株券等の大量買付行為への対応策（買収防衛策）（以下「本プラン」といいます。）を導入することを決議し、第70回定時株主総会の議案としてお諮りした結果、過半数をもって承認可決いただいております。

4. 上記の各取組みに対する当社取締役会の判断及びその理由

(1) 基本方針の実現に資する特別な取組み（上記2.）について

上記2.「当社の基本方針の実現に資する特別な取組み」に記載した各取組みは、当社の企業価値ひいては株主の皆様との共同の利益を継続的かつ持続的に向上させるための具体的取組みとして策定されたものであり、基本方針の実現に資するものです。

したがって、これらの各取組みは、基本方針に沿い、当社の株主の皆様との共同の利益を損なうものではなく、当社の会社役員の地位の維持を目的とするものではありません。

(2) 基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取組み（上記3.）について

イ. 当該取組みが基本方針に沿うものであること

本プランは、当社株券等に対する大量買付行為が行われる際に、当該大量買付行為に応じるべきか否かを株主の皆様が判断し、あるいは当社取締役会が代替案を提案するために必要十分な情報や時間を確保したり、株主の皆様のために大量買付者等と交渉を行うことなどを可能とすることにより、当社の企業価値ひいては株主の皆様との共同の利益を確保するための取組みであり、基本方針に沿うものであります。

ロ. 当該取組みが当社の株主の皆様との共同の利益を損なうものではなく、また、当社の会社役員の地位の維持を目的とするものではないこと

当社は、以下の理由により、本プランは、当社の株主の皆様との共同の利益を損なうものではなく、当社の会社役員の地位の維持を目的とするものではないと考えております。

い) 買収防衛策に関する指針等を充足していること

本プランは、経済産業省及び法務省が平成17年5月27日付で発表した「企業価値・株主共同の利益の確保又は向上のための買収防衛策に関する指針」において定められた①企業価値・株主共同の利益の確保・向上の原則、②事前開示・株主意思の原則、③必要性・相当性の原則の三原則を完全に充足し、また、株式会社大阪証券取引所の「企業行動規範に関する規則」第11条（買収防衛策の導入に係る遵守事項）の趣旨に合致したものです。さらに、本プランは、企業価値研究会が平成20年6月30日付で公表した「近時の諸環境の変化を踏まえた買収防衛策の在り方」の趣旨を踏まえた内容になっており、合理性を有するものであります。

ii) 株主の皆様の意思の重視と情報開示

当社は、本プラン導入について第70回定時株主総会において株主の皆様のご承認を得ております。

本プランの有効期間は、平成23年6月に開催予定の第73回定時株主総会の終了の時までとします。以降本プランの継続については3年ごとに定時株主総会の承認を得ることとします。ただし、有効期間中であっても、株主総会又は取締役会の決議により本プランは廃止されるものとします。

さらに、これらに加えて、取締役会は、実務上適切であると判断する場合又は独立委員会からの勧告があった場合には、株主総会を開催し、対抗措置の発動の是非についても、株主の皆様の意思を確認することとされており、株主の皆様の意思が反映されます。

また、株主の皆様に、本プランの廃止等の判断、大量買付行為に応じて当社株式の売却を行うか否かについての判断、及び対抗措置の発動の是非を判断する株主総会における議決権行使等の際の意思形成を適切に行うていただくために、取締役会は、大量買付情報その他大量買付者から提供を受けた情報を株主の皆様へ取締役会が適当と認める時期及び方法により開示することとしております。

iii) 当社取締役会の恣意的判断を排除するための仕組み

① 独立性の高い社外者の判断の重視

当社は、本プランの導入にあたり、取締役会の恣意的判断を排除するために、独立委員会を設置しております。

当社に対して大量買付行為がなされた場合には、独立委員会が、大量買付行為に対する対抗措置の発動の是非等について審議・検討した上で取締役会に対して勧告し、取締役会は当該勧告を最大限尊重して決議を行うこととされており、取締役会の恣意的判断に基づく対抗措置の発動を可及的に排除することができる仕組みが確保されています。

② 合理的な客観的要件の設定

本プランは、大量買付者が、本プランにおいて定められた大量買付ルールを遵守しない場合、又は大量買付者が、当社の企業価値を著しく損なう場合として合理的かつ詳細に定められた客観的要件を充足した場合のみ発動することとされており、この点においても、取締役会による恣意的な対抗措置の発動を可及的に排除する仕組みが確保されているものといえます。

さらに、取締役会が株主総会の開催を決定した場合には、対抗措置の発動の是非の決定は株主総会の決議に委ねられ、この点においても、取締役会による恣意的な対抗措置の発動を可及的に排除する仕組みが確保されているものといえます。

iv) デッドハンド型やスローハンド型買収防衛策ではないこと

本プランは、当社取締役会により廃止することができるものとされていることから、デッドハンド型買収防衛策（取締役会の構成員の過半数を交替させてもなお、発動を阻止できない買収防衛策）ではありません。また、当社の取締役の任期は1年となっており、期差任期制ではないため、本プランはスローハンド型買収防衛策（取締役会の構成員の交替を一度に行うことができないため、その発動を阻止するのに時間を要する買収防衛策）でもありません。

連結貸借対照表

(平成23年3月31日現在)

(単位：百万円)

資 産 の 部		負 債 の 部	
流 動 資 産	30,660	流 動 負 債	8,357
現金及び預金	16,190	買 掛 金	6,458
受取手形及び売掛金	7,593	短 期 借 入 金	800
有 価 証 券	1,914	未 払 法 人 税 等	46
た な 卸 資 産	3,304	賞 与 引 当 金	271
繰 延 税 金 資 産	526	そ の 他	780
そ の 他	1,135	固 定 負 債	418
貸 倒 引 当 金	△4	退 職 給 付 引 当 金	235
固 定 資 産	15,840	資 産 除 去 債 務	92
有 形 固 定 資 産	5,249	預 り 保 証 金	90
建 物 及 び 構 築 物	2,527	負 債 合 計	8,775
機 械 装 置 及 び 運 搬 具	1,978	純 資 産 の 部	
土 地	530	株 主 資 本	38,430
建 設 仮 勘 定	57	資 本 金	6,090
そ の 他	155	資 本 剰 余 金	6,517
無 形 固 定 資 産	17	利 益 剰 余 金	27,567
ソ フ ト ウ ェ ア	8	自 己 株 式	△1,744
そ の 他	8	そ の 他 の 包 括 利 益 累 計 額	△890
投 資 そ の 他 の 資 産	10,574	そ の 他 有 価 証 券 評 価 差 額 金	△685
投 資 有 価 証 券	8,860	為 替 換 算 調 整 勘 定	△204
関 係 会 社 株 式	464	少 数 株 主 持 分	185
長 期 貸 付 金	188		
繰 延 税 金 資 産	503		
積 立 保 険 料	483		
そ の 他	75		
貸 倒 引 当 金	△1	純 資 産 合 計	37,725
資 産 合 計	46,501	負 債 及 び 純 資 産 合 計	46,501

連 結 損 益 計 算 書

〔平成22年4月1日から
平成23年3月31日まで〕

(単位：百万円)

科 目	内 訳 金 額	金 額
売 上 高		26,556
売 上 原 価		21,510
売 上 総 利 益		5,046
販 売 費 及 び 一 般 管 理 費		3,876
営 業 利 益		1,170
営 業 外 収 益		
受 取 利 息	199	
受 取 配 当 金	65	
持 分 法 に よ る 投 資 利 益	41	
そ の 他	121	428
営 業 外 費 用		
支 払 利 息	7	
為 替 差 損	180	
そ の 他	249	437
経 常 利 益		1,161
特 別 利 益		
投 資 有 価 証 券 売 却 益	26	
貸 倒 引 当 金 戻 入 額	7	33
特 別 損 失		
投 資 有 価 証 券 評 価 損	37	
資 産 除 去 債 務 影 響 額	23	
ゴ ル フ 会 員 権 評 価 損	9	
固 定 資 産 除 売 却 損	7	76
税 金 等 調 整 前 当 期 純 利 益		1,117
法 人 税、住 民 税 及 び 事 業 税	343	
法 人 税 等 調 整 額	46	389
少 数 株 主 損 益 調 整 前 当 期 純 利 益		728
少 数 株 主 利 益		13
当 期 純 利 益		714

連結株主資本等変動計算書

〔平成22年4月1日から
平成23年3月31日まで〕

(単位：百万円)

	株 主 資 本				
	資 本 金	資本剰余金	利益剰余金	自 己 株 式	株主資本合計
平成22年3月31日残高	6,090	6,517	27,362	△1,741	38,228
連結会計年度中の変動額					
剰 余 金 の 配 当			△508		△508
当 期 純 利 益			714		714
自 己 株 式 の 取 得				△2	△2
株主資本以外の項目の連結 会計年度中の変動額(純額)					
連結会計年度中の変動額合計	—	—	205	△2	202
平成23年3月31日残高	6,090	6,517	27,567	△1,744	38,430

(単位：百万円)

	その他の包括利益累計額			少数株主持分	純 資 産 合 計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘定	その他の包括 利益累計額合計		
平成22年3月31日残高	△327	△187	△514	199	37,913
連結会計年度中の変動額					
剰 余 金 の 配 当					△508
当 期 純 利 益					714
自 己 株 式 の 取 得					△2
株主資本以外の項目の連結 会計年度中の変動額(純額)	△358	△17	△375	△13	△389
連結会計年度中の変動額合計	△358	△17	△375	△13	△187
平成23年3月31日残高	△685	△204	△890	185	37,725

連結注記表

(連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項に関する注記)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数及び主要な連結子会社の名称

連結子会社の数 1社

連結子会社の名称：株式会社マツモトユシ・インドネシア

(2) 主要な非連結子会社の名称等

非連結子会社の数 1社

非連結子会社の名称：立松化工股份有限公司

連結の範囲から除いた理由

小規模な会社であり、総資産、売上高、当期純利益及び利益剰余金（持分に見合う額）等は、いずれも連結計算書類に重要な影響を及ぼしていないためであります。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法を適用した非連結子会社及び関連会社の数及び主要な会社等の名称

持分法を適用した非連結子会社の数 1社

会社の名称：立松化工股份有限公司

持分法を適用した関連会社の数 1社

会社の名称：日本クエーカー・ケミカル株式会社

(2) 持分法を適用していない非連結子会社及び関連会社の名称等

該当事項はありません。

(3) 持分法の適用の手続について特に記載すべき事項

持分法適用会社のうち、決算日が連結決算日と異なる会社については、各社の直近の事業年度に係る計算書類を使用しております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社である株式会社マツモトユシ・インドネシアの決算日は12月31日であり、連結決算日との差は3ヶ月以内であるため、当該連結子会社の事業年度に係る計算書類を使用して連結を行っております。ただし、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

4. 会計処理基準に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券の評価基準及び評価方法

その他有価証券：時価のあるものは決算期末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は総平均法により算定）
時価のないものは総平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資（金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの）については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎として、持分相当額を取り込む方法によっております。

② たな卸資産の評価基準及び評価方法

評価基準は原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）によっております。

製品・商品・仕掛品：主として総平均法

原材料：主として総平均法

貯蔵品・容器（原材料）：主として最終仕入原価法

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産：建物（建物附属設備は除く）

① 平成10年3月31日以前に取得したもの

主として法人税法に定める方法と同一の基準による旧定率法

② 平成10年4月1日から平成19年3月31日までに取得したもの

主として法人税法に定める方法と同一の基準による旧定額法

③ 平成19年4月1日以後に取得したもの

主として法人税法に定める方法と同一の基準による定額法

建物、機械装置以外

① 平成19年3月31日以前に取得したもの

主として法人税法に定める方法と同一の基準による旧定率法

② 平成19年4月1日以後に取得したもの

主として法人税法に定める方法と同一の基準による定率法

機械装置

① 平成19年3月31日以前に取得したもの

主として法人税法に定める方法と同一の基準による旧定額法

② 平成19年4月1日以後に取得したもの

主として法人税法に定める方法と同一の基準による定額法

無形固定資産：法人税法に定める方法と同一の基準による定額法によっております。ただし、ソフトウェア（自社利用分）については、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法によっております。

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等の特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上することとしております。

② 賞与引当金

当社は、従業員の賞与の支払に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。なお、連結子会社は計上しておりません。

③ 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。数理計算上の差異は翌連結会計年度から定額法により5年間で処理することとしております。

(4) その他連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項

① 重要な外貨建資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社の資産、負債、収益及び費用は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定及び少数株主持分を含めて計上しております。

② 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式により処理しております。

5. 連結計算書類作成のための基本となる重要な事項の変更

(会計方針の変更)

(1) 会計処理の原則及び手続の変更

当連結会計年度から平成20年3月31日公表の「資産除去債務に関する会計基準」(企業会計基準委員会 企業会計基準第18号)及び「資産除去債務に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準委員会 企業会計基準適用指針第21号)を適用しております。

この結果、従来の方法によった場合に比べて、売上総利益は10百万円、営業利益及び経常利益は11百万円、税金等調整前当期純利益は34百万円それぞれ減少しております。

(2) 表示方法の変更

会社計算規則の改正に伴い、当連結会計年度より連結貸借対照表及び連結株主資本等変動計算書における「評価・換算差額等」は「その他の包括利益累計額」として表示する方法に、連結損益計算書において「少数株主損益調整前当期純利益」の科目を表示する方法にそれぞれ変更しております。

(連結貸借対照表に関する注記)

1. 有形固定資産の減価償却累計額 12,873百万円
2. 保証債務
他の会社の金融機関からの借入債務に対し、保証を行っております。
立松化工股份有限公司 315百万円
3. 過年度に取得した資産のうち国庫補助金による圧縮記帳額は、機械装置及び運搬具36百万円であり、連結貸借対照表計上額は、この圧縮記帳額を控除しております。

(連結株主資本等変動計算書に関する注記)

1. 当連結会計年度末における発行済株式の種類及び総数
普通株式 11,281,629株
2. 配当に関する事項
(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成22年6月25日 定時株主総会	普通株式	508	50	平成22年 3月31日	平成22年 6月28日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の 総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成23年6月29日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	508	50	平成23年 3月31日	平成23年 6月30日

(金融商品に関する注記)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については原則として資産の保全を目的とし、安全性の高いものに限って行うものとしております。また、資金調達については短期的な運転資金を銀行借入により調達しております。

必要に応じてデリバティブ取引等を行う場合は、取締役会の承認を得るものとしております。

(2) 金融商品の内容及びリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されています。また、海外展開に伴う外貨建の営業債権、海外関係会社への長期貸付金は為替の変動リスクに晒されています。

有価証券及び投資有価証券は、主に株式、債券、投資信託、投資事業組合出資であり、市場価格の変動リスク及び発行体の信用リスクに晒されています。

営業債務である買掛金は、6ヶ月以内の支払期日となっております。また、その一部には、原料等の輸入に伴う外貨建のものがあり、為替の変動リスクに晒されていますが、恒常的に同じ外貨建の売掛金残高の範囲内にあります。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスク（取引先の契約不履行に係るリスク）の管理

営業債権に関しては、営業部門が取引先ごとに期日管理及び残高管理を毎月行うとともに、回収遅延のおそれのあるときは関係部門と連絡を取り、速やかに適切な処理を取るようしております。

金融商品は、金融商品並びに為替管理規定に従い、取締役会の承認を得た安全性の高いものを対象としています。

当期の連結決算日現在における最大信用リスク額は、信用リスクに晒される金融資産の貸借対照表価額により表されています。

② 市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

株式は、定期的に時価や発行体企業の財務状況を把握しております。また、債券、投資信託、投資事業組合出資については、継続的なモニタリングを通して管理しております。

③ 資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実行できなくなるリスク）の管理

営業債務や借入金は、手元流動性を高水準に保つことにより流動性リスクを回避しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく時価のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価格が含まれております。当該価格の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

平成23年3月31日（当期の連結決算日）における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

（単位：百万円）

	連結貸借対照表 計上額（*）	時価	差額
(1) 現金及び預金	16,190	16,190	—
(2) 受取手形及び売掛金	7,593	7,593	—
(3) 有価証券及び投資有価証券 その他有価証券	8,078	8,078	—
(4) 長期貸付金	188	179	△8
(5) 買掛金	(6,458)	(6,458)	—
(6) 短期借入金	(800)	(800)	—

（*）負債に計上されているものについては、（ ）で示しております。

（注1）金融商品の時価の算定方法並びに有価証券に関する事項

(1) 現金及び預金、並びに (2) 受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3) 有価証券及び投資有価証券

これらの時価について、株式等は取引所の価格によっております。債券は、取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。

(4) 長期貸付金

時価の算定は、その一定の期間ごとに分類し、その将来キャッシュ・フローを国債の利回り等適切な指標の利率で割引いた現在価値により算出しております。

(5) 買掛金、並びに (6) 短期借入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

（注2）非上場株式等（連結貸借対照表計上額3,160百万円）は、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積ることなどができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため「(3) 有価証券及び投資有価証券 その他の有価証券」には含めておりません。

（1株当たり情報に関する注記）

1株当たり純資産額	3,688円25銭
1株当たり当期純利益	70円17銭

貸借対照表

(平成23年3月31日現在)

(単位：百万円)

資 産 の 部		負 債 の 部	
流 動 資 産	30,308	流 動 負 債	8,300
現金及び預金	16,118	買掛金	6,407
受取手形	795	短期借入金	800
売掛金	6,744	未払金	745
有価証券	1,914	未払法人税等	44
商品及び製品	1,787	賞与引当金	271
原材料	897	その他	32
仕掛品	391	固 定 負 債	402
貯蔵品	35	退職給付引当金	220
繰延税金資産	508	資産除去債務	92
預け金	1,005	預り保証金	90
その他	113		
貸倒引当金	△4	負 債 合 計	8,703
固 定 資 産	15,631	純 資 産 の 部	
有 形 固 定 資 産	5,199	株 主 資 本	37,922
建物	1,493	資本金	6,090
構築物	1,020	資本剰余金	6,517
機械装置	1,956	資本準備金	6,517
車両運搬具	8	利 益 剰 余 金	27,059
工具・器具・備品	151	利益準備金	785
土地	510	その他利益剰余金	26,274
建設仮勘定	57	退職給与積立金	300
無 形 固 定 資 産	17	特別償却準備金	5
ソフトウェア	8	別途積立金	24,800
その他	8	繰越利益剰余金	1,168
投資その他の資産	10,414	自 己 株 式	△1,744
投資有価証券	8,860	評価・換算差額等	△685
関係会社株式	311	その他有価証券評価差額金	△685
長期貸付金	188		
繰延税金資産	499		
積立保険料	483		
その他	73		
貸倒引当金	△1	純 資 産 合 計	37,236
資 産 合 計	45,940	負 債 及 び 純 資 産 合 計	45,940

損 益 計 算 書

〔平成22年4月1日から
平成23年3月31日まで〕

(単位：百万円)

科 目	内 訳 金 額	金 額
売 上 高		26,202
売 上 原 価		21,258
売 上 総 利 益		4,943
販 売 費 及 び 一 般 管 理 費		3,810
営 業 利 益		1,133
営 業 外 収 益		
受 取 利 息	198	
受 取 配 当 金	98	
そ の 他	119	416
営 業 外 費 用		
支 払 利 息	7	
為 替 差 損	174	
そ の 他	249	431
経 常 利 益		1,117
特 別 利 益		
投 資 有 価 証 券 売 却 益	26	
貸 倒 引 当 金 戻 入 額	7	33
特 別 損 失		
投 資 有 価 証 券 評 価 損	37	
資 産 除 去 債 務 影 響 額	23	
ゴ ル フ 会 員 権 評 価 損	9	
固 定 資 産 除 売 却 損	7	76
税 引 前 当 期 純 利 益		1,074
法 人 税、住 民 税 及 び 事 業 税	327	
法 人 税 等 調 整 額	49	377
当 期 純 利 益		697

株主資本等変動計算書

〔平成22年4月1日から
平成23年3月31日まで〕

(単位：百万円)

	株 主 資 本		
	資 本 金	資 本 剰 余 金	
		資 本 準 備 金	資 本 剰 余 金 合 計
平成22年3月31日残高	6,090	6,517	6,517
事業年度中の変動額			
特別償却準備金の取崩			
剰余金の配当			
当期純利益			
自己株式の取得			
株主資本以外の項目の事業年度中の変動額(純額)			
事業年度中の変動額合計	—	—	—
平成23年3月31日残高	6,090	6,517	6,517

(単位：百万円)

	株 主 資 本					
	利 益 剰 余 金					
	利益準備金	そ の 他 利 益 剰 余 金				利 益 剰 余 金 合 計
退 職 給 与 積 立 金		特 別 償 却 準 備 金	別 途 積 立 金	繰 越 利 益 剰 余 金		
平成22年3月31日残高	785	300	7	24,800	978	26,871
事業年度中の変動額						
特別償却準備金の取崩			△2		2	—
剰余金の配当					△508	△508
当期純利益					697	697
自己株式の取得						
株主資本以外の項目の事業年度中の変動額(純額)						
事業年度中の変動額合計	—	—	△2	—	190	188
平成23年3月31日残高	785	300	5	24,800	1,168	27,059

(単位：百万円)

	株 主 資 本		評 価 ・ 換 算 差 額 等		純資産合計
	自 己 株 式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評 価 ・ 換 算 差 額 等 合 計	
平成22年3月31日残高	△1,741	37,737	△327	△327	37,409
事業年度中の変動額					
特別償却準備金の取崩		—			—
剰 余 金 の 配 当		△508			△508
当 期 純 利 益		697			697
自 己 株 式 の 取 得	△2	△2			△2
株主資本以外の項目の事業 年度中の変動額(純額)			△358	△358	△358
事業年度中の変動額合計	△2	185	△358	△358	△173
平成23年3月31日残高	△1,744	37,922	△685	△685	37,236

個別注記表

1. 重要な会計方針に係る事項に関する注記

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

子会社株式及び関連会社株式：総平均法による原価法

その他有価証券：時価のあるものは決算期末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は総平均法により算定）
時価のないものは総平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資（金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの）については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎として、持分相当額を取り込む方法によっております。

(2) たな卸資産の評価基準及び評価方法

評価基準は原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）によっております。

製品・商品・仕掛品：総平均法

原材料：総平均法

貯蔵品・容器（原材料）：最終仕入原価法

(3) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産：建物（建物附属設備は除く）

① 平成10年3月31日以前に取得したもの
旧定率法

② 平成10年4月1日から平成19年3月31日までに取得したもの
旧定額法

③ 平成19年4月1日以後に取得したもの
定額法

建物、機械装置以外

① 平成19年3月31日以前に取得したもの
旧定率法

② 平成19年4月1日以後に取得したもの
定率法

機械装置

① 平成19年3月31日以前に取得したもの
旧定額法

② 平成19年4月1日以降に取得したもの
定額法

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物及び構築物 10～50年

機械装置 8年

工具器具備品 4～10年

無形固定資産：法人税法に定める方法と同一の基準による定額法。

ただし、ソフトウェア（自社利用分）については、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法。

- (4) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準
外貨建金銭債権債務は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。
- (5) 引当金の計上基準
- ① 貸倒引当金
債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等の特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上することとしております。
- ② 賞与引当金
従業員の賞与の支払に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。
- ③ 退職給付引当金
従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。
数理計算上の差異は翌事業年度から定額法により5年間で処理することとしております。
- (6) 消費税等の会計処理
消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式により処理しております。
- (7) 会計方針の変更
(会計処理の原則又は手続の変更)
当事業年度から平成20年3月31日公表の「資産除去債務に関する会計基準」(企業会計基準委員会 企業会計基準第18号)及び「資産除去債務に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準委員会 企業会計基準適用指針第21号)を適用しております。
この結果、従来の方法によった場合に比べて、売上総利益は10百万円、営業利益及び経常利益は11百万円、税引前当期純利益は34百万円それぞれ減少しております。

2. 貸借対照表に関する注記

- (1) 有形固定資産の減価償却累計額 12,726百万円
- (2) 保証債務
他の会社の金融機関からの借入債務に対し、保証を行っております。
立松化工股份有限公司 315百万円
- (3) 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務(区分表示したものを除く)
- | | |
|--------|----------|
| 短期金銭債権 | 1,934百万円 |
| 長期金銭債権 | 187百万円 |
| 短期金銭債務 | 1,150百万円 |
| 長期金銭債務 | 18百万円 |
- (4) 過年度に取得した資産のうち国庫補助金による圧縮記帳額は、機械装置36百万円であり、貸借対照表計上額は、この圧縮記帳額を控除しております。

3. 損益計算書に関する注記

関係会社との取引高

営業取引による取引高

売上高	4,564百万円
仕入高	2,301百万円
販売費及び一般管理費	68百万円
営業取引以外の取引による取引高	99百万円

4. 株主資本等変動計算書に関する注記

当事業年度末における自己株式数

普通株式	1,103,308株
------	------------

5. 税効果会計に関する注記

繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

繰延税金資産

流動資産

賞与引当金	110百万円
その他有価証券評価差額金	359百万円
その他	40百万円
計	509百万円

固定資産

退職給付引当金	89百万円
投資有価証券評価損	201百万円
ゴルフ会員権評価損	56百万円
その他有価証券評価差額金	339百万円
その他	42百万円
計	729百万円

繰延税金資産合計 1,239百万円

繰延税金負債

流動負債

特別償却準備金	1百万円
計	1百万円

固定負債

その他有価証券評価差額金	228百万円
特別償却準備金	1百万円
計	229百万円

繰延税金負債合計 231百万円

6. 1株当たり情報に関する注記

1株当たり純資産額	3,658円44銭
1株当たり当期純利益	68円48銭

株 主 メ モ

事業年度	毎年4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	6月下旬
単元株式数	500株
基準日	3月31日 その他必要がある場合は、あらかじめ公告して定める日
株主名簿管理人及び特別口座の口座管理機関	大阪府中央区北浜四丁目5番33号 住友信託銀行株式会社
株主名簿管理人事務取扱場所	大阪府中央区北浜四丁目5番33号 住友信託銀行株式会社 証券代行部
(郵便物送付先)	〒183-8701 東京都府中市日鋼町1番10 住友信託銀行株式会社 証券代行部
(電話照会先)	☎ 0120-176-417
(インターネットホームページURL)	http://www.sumitomotrust.co.jp/STA/retail/service/daiko/index.html
公告方法	大阪府において発行する「日本経済新聞」に掲載しております。
上場証券取引所	大阪証券取引所（JASDAQ市場）

※ご注意

【株式に関する住所変更等のお届出及びご照会について】

証券会社に口座を開設されている株主様は、住所変更等のお届出及び照会は、口座のある証券会社宛にお願いいたします。証券会社に口座を開設されていない株主様は、上記の電話照会先にご連絡ください。

【特別口座について】

株券電子化前に「ほふり」（株式会社証券保管振替機構）を利用されていなかった株主様には、株主名簿管理人である上記の住友信託銀行株式会社に口座（特別口座といいます。）を開設いたしました。特別口座についてのご照会及び住所変更等のお届出は、上記の電話照会先をお願いいたします。